

2012



平成 24 年 2 月 発行

No. 86

社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市千秋久保田町
2番 23号 佐々木方

TEL・FAX 018(833)2525

発行者 佐々木 民 秀

編集者 鈴木 裕 子

秋の里山山行

高山は、国土地理院の二万五千分の地図に山名は載っていないが、白神山地の一角にあり、近年、峨嵋峽と併せて整備された里山である。

十月二十二日(土)、秋田北インター集合のメンバーは、三台に分乗して午前七時二十分出発。降り始めた雨は途中からワイパーが激しく動くこともあったが、白神山地世界遺産センター・藤里館に到着する頃には止んでくれた。

センター背後にある温泉宿南側、登山口入り口まで車を進める。ここが縦走して来て下山する場であることを全員で確認してからいったん県道に戻り、峨嵋大滝手前右側の山道を十分程車を走らせる。「高山山頂入口2km」の表示のある白木角柱の場所に九時に到着。佐藤(博)、鎌田(両)会員は、すぐに先程確認した下山予定場所へ車を一台廻しに行き、戻って来ることになる。

二人が追いつくまで、ゆっくり歩を進めることになった。

雨はほとんど降っていないが、ザックカバリーに傘を準備し出発する。なかなか杉林の林道から四十分ほどで左に折れ、いよいよ登りとなる。急坂は丸太模擬木のステップ階段が取り付けられていて、びっくりするほど整備されていた。

後続の二人も追いつき、木洩れ日も射す天気となってきた。落葉した稍越しに遠方が見通せるようになり、山々

秋の里山山行 高山と高岩山

柴田 勸

の紅葉、笹の青さのコントラストが心地よく癒される。杉林をいったん下り、笹原を登り詰めると視界が広がり、そこが標高三六八・八米高山の頂上であった(十時)。

早速、白神山地の山々確認研究会になった。答えは、すぐそばに立派な案内の写真入石版が設置されており、駒ヶ岳、長場内岳などはっきりと確認できた。



高山山頂にて

記念写真を撮り、十時二十分下山開始。登って来た方向の反対側(南)へ笹原を突っ切り、ジグザグの急な木階段を降りていく。雨の心配は消え、里山の紅葉を楽しみながら下ると、間もなく、ブナ、ナラの林となり、四十分ほどで駐車場の温泉に着いた。

佐藤(博)、鎌田(両)会員に車廻送をお願いして、我々はセンターまでを十分ほどを歩く。二人を待ち、全員でセンターを見学後、軒下の場所をお借りして昼食を楽しんだ。

午後からは、上流の藤琴田中の権現の大銀杏と峨嵋大滝、南下して藤里町大沢にある水神様の大ケヤキ等の樹木巡りをする。ここで鎌田会員が、二ツ井町五輪坂の高岩神社へ寄ろうと提案があり、全員で行くことにした。

高岩神社までの約三軒の参道には、杉の大樹や奇岩が数多くあり、高岩神社と高岩山は、メインの高山とは別の印象的な山行となった。

山中深くに山の斜面にせり出すようにして、まるで清水寺のような舞台造の神社があった。神社の岩場を登り、山頂と思われる地点着。巨岩、奇岩の岩山、スリル満点の岩山からの紅葉と日本海方向への展望などをバックに写真を撮り合った。

暑からず寒からず、まずまずのお天気の一日に全員満足顔で下山。十五時三十分秋田北インター向け出発、帰路についた。

参加者 佐々木(民) 今野(昌) 鎌田(佐藤(博)) 高橋(忠) 石川(柴田(勸)) 伊藤(秀) 佐々木(長) 鈴木(裕) 会員外 藤田(正) 柴田(路)

高山と高岩山

佐々木 民秀

高山は藤里町の里山で、平成十一年に標柱や四阿屋、歩道などが整備され、ハイキング最適の山としてデビュー。

登山口は峨嵋峽の林道からと湯ノ沢温泉からあり、縦走も可能である。車一台湯ノ沢温泉側にデポし、林道分岐に駐車。

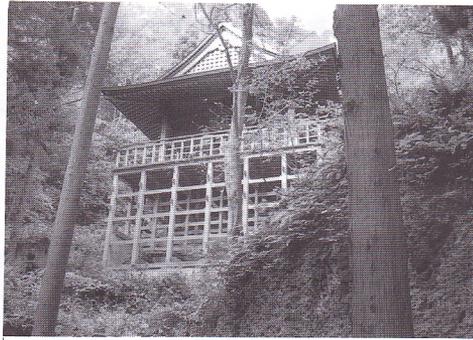
ここから南に延びた林道を行くと標柱の立つ登山口に着く。この先登りとなるが、木段をあがると山頂から東に延びた尾根上になる。雑木林の尾根筋を行くと視界が開け、四阿屋やベンチ、石碑のある広々とした展望抜群の山頂に着く。下山は気持ちの良い笹地を下り、雑木林や杉林の斜面を下りると湯ノ沢温泉の登山口に出る。

高岩山は、二ツ井荷上場の信仰の山。この山は、対岸にある七座山と同じく岩峰を有し、その真下には床組高く、まるで清水寺の形をなす立派な高岩神社がある。

神社の脇の岩場（穴ぼこ多し）には諸処の神々が祀られており、三吉大神の石碑もあった。すぐ裏に篋目岩の大岩があり、十分ほどで山頂に至る。山頂少し手前に女御殿岩の頭にて、ここには大日如来の石像が祀られている。ここからの展望は抜群である。また、分岐からの岩峰は男御殿岩で、十米程の垂直の岩でクサリはあるが、高齢者や初心者は登らない方がよい。狭い山頂にも大日如来が祀られている。

山の一つでもある。

高岩山は高山と共に小さな里山であり、これまで注目されず、登山界では知られずの山であったが、歴史的にも価値があり、秋田の隠れていた



高岩神社

参考 インターネットから

高岩神社は、平安時代に自覚大師が開いたとされ、中世には修験僧の修行の場として多くの寺院が建立されていた。境内には様々な岩窟があり、護摩や修験の跡、仏像の安置場所も有り、霊山に相応しい趣がある。高岩神社には「裸参り」の行事があり、旧暦の小正月に、二ツ井荷上集落の裸若衆が、藤琴川で禊をし、雪の参道を駆けて神社に参詣する。元々は徴兵検査前の若者が武運長久を祈願したと言われている。

太平山・前岳に案内版設置

周辺歩道の刈り払い

堀井 弘

この事業は、二十三年度総会で承認され、私と鎌田会員が担当となった。目的は、秋田市中岳までのコースは、特に、前岳から中岳までのコースは、四季を通しての人気コースになっているが、女人堂から前岳への歩道がはつきりせず、殆どの登山者は、前岳には登らず、左側斜面の回り道を通り、一の沢分岐に出て中岳へと向かっているが、一の沢コースは一部崩壊箇所があり、注意が必要である。

秋田支部では、二年前に前岳を通り、中岳へのコースが分かる様に、案内板と標柱を設置したが、悪質な登山者により撤去されてしまい、再度、案内板を設置することにし、私が秋田杉材を準備し、「前岳へ」「女人堂」「中岳へ」と彫刻し作成した。

十一月六日（日）、前岳登山口・二手の又駐車地に十四名集合、天気は曇り、小雨模様で心配だったが、この日を逃すとこれからは雪が予想されるので実施することになった。ミーティングを行い、それぞれ、案内板や作業用具一式を分担して背負い、八時三十分出発。

雲が流れており、天気はどうか持ちそう、山の気温はヒンヤリとして作業には丁度良さそうである。ジグザクの急な登山道左右の、黄葉しているオオバクロモジの木が、実に

綺麗である。途中、ブナの倒木が登山道を塞いでいるので、鉋、鋸で処理をする。



前岳山頂への案内版



莪苳り作業

金山滝分岐で小休止。ゆっくりフアイトでタイムも順調である。女人堂を通過し、九時五十分、前岳到着。歩道整備と案内版設置に取り掛



作業を終えて記念撮影

かかる。それぞれ、草刈機や平鎌、剪定バサミなどでやぶを払い、案内板を取り付ける。女人堂から一の沢分岐までの旧道も無事に復活、多くの登山者がより楽しく安全に登れるようになったと思う。

昼食は、前岳山頂でフライシートを張り、賑やかな恒例の昼食会となった。下山時には、女人堂周辺歩道の刈り払いも行い、十四時四十分駐車地到着。有意義な一日であった。

参加者 佐々木(民) 福田(光) 柳田
鈴木(裕) 堀井 鎌田 佐藤(博)
高橋(忠) 石川 柴田 伊藤(秀)
安藤(金)
会員外 畠山(秀) 永田

晩餐会記念山行 箱根駒ヶ岳・神山山行報告

佐々木 長 秀

十二月四(日)、日本山岳会年次晩餐会・懇親山行の箱根駒ヶ岳、神山に参加した。

参加者は、尾上会長を含め約百名。二台の大型バスに分乗して、箱根園のロープウェイ駅に到着。地元静岡支部の皆さんの出迎えと、「みかん」の差し入れをいただき、参加者一同感激した。ロープウェイは、標高差六百米を僅か七分で登る。眼下に芦ノ湖が広がり、その先に白い雪の帽子を被った富士山が、真っ青な空を背景に聳えている。また、遠く相模湾には、初島や伊豆大島をハッキリ見ることが出来る。静岡支部の皆さんが、「地元の者にとっても、こんなにすばらしい天気はめずらしい」と話していた。

階段状の道を登ると、すぐそこが箱根駒ヶ岳(二三五六)の山頂だった。山全体が草で覆われているが、山頂部分だけは岩が露出している。そこに箱根神社の前身である元宮神社が祀られており、安全登山を祈念して手を合わせた。

百名の参加者が勢揃いして、日本一の山・富士山を借景としての記念撮影。しかし、あまりに多数のため、一人一人が豆粒の様で、良く顔がわからないのが残念である。

今回の山行の主要目標は、箱根の最高峰・神山の登頂だ。ここから見ただけでも、間違いなく駒ヶ岳よりも神山

のほうが、少しは高く聳えている様に思える。まず、草原状の斜面を鞍部まで下る。



2011年12月4日 日本山岳会箱根駒ヶ岳・神山山行

我々を追い越そうとするグループの中に、富士山の一千回登頂を達成し、前日の晩餐会で「会長特別表彰」を受けた實川さんがいる。さっそく握手し、記念写真をお願いした。

さらに進むと、防ヶ沢分岐に出る。

左に下ると芦ノ湖に達し、右に進むと早雲山に達するコースである。この「お中道」と呼ばれているコースを十年以上前、雨の中、妻と一緒に下山したことを思い出した。

この分岐を神山を目指して直進する。箱根を代表する樹木である、ブナ・ミズナラ・アセビ・ヒメシヤラの林の中を約一時間、ゆっくりと登る。

何度かの小休止を繰り返すうちに、突然、「神山山頂」と書かれた標柱が現れた。

神山(二四三八)米は、箱根の最高峰にも拘わらず、樹木で覆われているため、あまり展望は期待できない。山頂らしくない「山頂」である。狭い草はらで、昼食を兼ねた大休止をとった。満腹になったところで、のんびりと下山を始める。樹林の間から芦ノ湖・大涌谷、そして富士山が見える。やがて冠ヶ岳への分岐に着く。冠ヶ岳(一四一二)の山頂までは、十分程で往復することが出来た。

箱根での最後の火山活動は、神山の大爆發であり、その時、早川が堰き止められ、芦ノ湖が出来たとされている。また、その崩壊の跡が大涌谷であり、冠ヶ岳は、溶岩が盛り上がり誕生したとの事である。こうした火山活動に積るものなのか、下山道は大きな岩が積み重なった上を歩かなければならない好天のもと、大涌谷から神山・駒ヶ岳へと逆コースを進む登山者と、次々に擦れ違ふ。ようやく真正面に端正な富士山の姿が見えて来た。

次第にガスの臭いが強くなり、観光客で賑わう大涌谷駐車場に到着。振り返ると、岩の塊が突き出した様な冠ヶ岳

が荒々しい山肌を見せている。雨の山行も趣がある」とは言え、やはり好天の山行はすばらしいと思う。特に、富士山の姿に感動させられた一日となった。ゆっくり休みながら、約四時間の実に楽しい山行であった。
参加者 今野(昌) 福田(光)
佐々木(長)

年次晩餐会開催

十二月三日午後六時から、東京品川プリンスホテル・アネックスタワーで開催。四二五名参加。
秋田支部参加者 福田光子 今野昌雄 高橋浩二

支部長会議

晩餐会に先立ち、本会議室で開催
今野(昌)副支部長出席

支部事務局担当者会議開催

二十四年一月二十一日から二十二日、本会議室で開催。鈴木(裕)出席

会議は、新法人に移行するための支部規約を中心に、公益法人としての予算・決算についての説明、質問、討議が中心であった。

高原理事の司会で始まり、尾上会長の挨拶は、会費を中心に活動している会なのに、はた迷惑な法律に振り回されている、大変な事になったと思われるので協力して欲しいとのことであった。まず、支部の名称は四月一日から公

益法人日本山岳会秋田支部となる。

そのため、本年は四月一日は日曜日であるが、本会理事会を開催し、「支部に関する規程」を審議・議決する。

規程は、本会と支部との事業・会計・ガバナンスの一体化を目指すものであり、支部長は会長が任命するとなっている。

各支部では、「新定款」及び「支部に関する規程」に基づき、四月一日には新法人に移行出来るよう「支部規約」を作成するようにとの事であった。

新規約は、四月一日の本会理事会で承認決議をしなければならぬので、支部では、新規約(案)を制定して三月上旬までに提示するよう求められた。

小林常務理事の説明では、公益法人として認可されるまでは、文科省の審議は厳しい。現在、公益事業比率は八二・九%となっているので、無理に支部には押し付けるつもりは無いということであるが、公益事業を行わないと補助金は無となる。

吉川会計士から決算についての説明があり、領収書等についての説明を受ける。その他色々の意見交換がおこなわれ、募集登山の安全性についての保険の範囲等が話し合われたが、結論は出なかった。

また、各プロジェクトからの報告や、各支部からの二十四年度事業についての説明。事務連絡は、四国支部が三十一番目の支部として二月十四日設立。全国支部懇談会は、十月二十日(土)と二十一日、千葉支部主催で九十九里浜で開催。懇親登山は未定。東北・北海道地区は、十二月九日(日)と十日(月)福島支部主催。会場は未定。以上。

図書館に記念誌等寄贈

支部設立五十周年を区切りとして、本年度に入ってから支部の資料を整理し、引き続いて、これまで秋田支部で発行した記念誌や秋田山岳の合本、海外登山の報告書等を県内の一部図書館に寄贈した。

報告書の一部不足もあり、鈴木要二、福田光子、柳田勇悦、鈴木裕子の各会員から提出の協力をいただいた。また、支部会員の出版した山岳関係の私家本も併せて寄贈した。(延べ約百冊)
尚、各図書館では保管場所が狭くなり、秋田県関係以外の本は受付していない。

寄贈先 県立図書館 秋田市明德館
秋田市土崎図書館 横手市立図書館

寄贈図書

- ・支部設立四十周年記念誌
 - ・支部設立五十周年記念誌
 - ・「秋田山岳」第一巻
 - ・「秋田山岳」第二巻
 - ・日台友好南湖大山・太平山登山報告書
 - ・ボルネオ島・キナバル山登山報告書
 - ・日台友好玉山・雪山登山報告書
 - ・日台友好秀姑巒山登山報告書
 - ・韓国雪嶽山・五台山登山報告書
 - ・韓国漢翠山・俗離山登山報告書
 - ・韓国俗離山・月岳山・鳥嶺山・小白山登山報告書
 - ・韓国徳裕山・伽耶山登山報告書
- 私家本
長岩嘉悦 吉川信市
佐々木民秀 鈴木裕子

佐々木民秀会員

日本の峰・千二百峰登る

本格的に登山活動を始めてから五十五年(一年も休まず皆勤)、この間に、国内の峰々千二百峰を登り越す。基準としては、国土地理院発行地図や一部の登山用地図、ガイドブックの地図に記載されている峰々を拾い上げたもの。

太平山遭難救助協力員を登録

中央地区山岳協議会の太平山遭難救助協力員として(平成二十四・二十五年度)秋田支部の次の会員を登録しました。

- 佐々木民秀 鎌田倫夫 安藤金栄
 - 柴田勲 今野昌雄 伊藤秀雄
 - 三浦真六 佐藤安弘 堀井弘
 - 鈴木裕子
- 他団体からの登録
若月寿 打矢道雄 佐藤博
柳田勇悦 福田光子 長岡幸則
大橋忠雄 川口廣志 佐藤栄治

訂正

八十五号二頁上段 参加者に伊藤秀雄を加える。

訪台登山を計画

台湾南部にある北大武山への登山を計画しております。五月予定。